

久高将吉さん

1933(昭和8)年2月12日生まれ

当時の本籍地 沖縄県

民間人

泊国民学校



対馬丸に乗船

●1944(昭和19)年8月21日 一般疎開で対馬丸に乗船

宮崎に疎開するため対馬丸に乗船。両親と13歳の兄と、一般疎開で行った。学童疎開は学校が募集をして小学校3年―6年の児童だけで、一般疎開は父兄と。父兄は30代と小さな子供たち。女の人が多く、男の人はほとんど兵隊にいていなかった。陸軍の徴用船だったから陸軍の兵隊さんがいた。

●1944(昭和19)年8月22日午後10時 対馬丸沈没

船員が「10時15分！」という声を聞いた。大きな音がしたと思うが、不思議なくらい音が聞こえなかった。ものすごい音がしたという人もいる。

旧暦2日の細い月で夜は暗い。家族は一緒に甲板にいた。船は後ろから沈んでいった。いかだは船の後方にあつて、船が沈む前にいかだが浮いてきてしがみつこうとすることができた。学童は船の前方に集められていた。先生が「海に飛び込め！」と言っても子供は怖くてできないでしょう。

両親と自分は同じいかだ、兄はとなりのいかだに乗っていた。こちらに呼び寄せればよかったが、「ああ乗っているから大丈夫」だと。兄が金物の水筒を投げて渡した。ペしゃんこに割れて水はなかった。兄は怪我をしたんじゃないかと思う。自分はここにいるということを知らせるために投げたのかも。いかだやら他の浮遊物がごつごつとぶつかる。父が2つのいかだをロープで結びつけて、20名くらいいたと思う。波は穏やかでいかだも揺れなかった。

●1944(昭和19)年8月23―28日 約1週間漂流

次の日は低気圧で、三角波がぶつかって、あの裏山の高さ(7、8m?)くらいの波になる。ロープが切れ、いかだはばらばらになった。2畳ほどのいかだに10名。ぶつかるくらいだったのに、他のいかだが見えなくなった。

大人が4、5名。会話は無い。子供同士、どこの学校で何年生というくらいは会話した。同級生が一人いた。だんだん人がいなくなる。夜が明けると人が減っているのに気付く。

2、3日後にまた海が荒れた。その頃には4名になっていた(久高さんと両親、同級生)。いかだが軽くなって水面から浮くくらい。高波がくると、波を上がっていき、一気に落ちる。最初は私たちだけと思っていたが、波の上から遠くのいかだがいくつも見えた。

いかだに伏せた体勢でロープを掴んでいた。怖いという気持ちはなかった。ひもじいのは分からなくなっても喉は乾いた。2、3日経つと水が欲しくて幻を見るようになった。海面に水瓶が見える。「ああ、水だ、水だ」。はっと目が覚めたら「ああ、まだ海にいる」。いかだの上に置も見えた。

助からなかった人は、いかだの上に立って、「水だ、水だ」と歩いていく気持ちで落ちる。自分は怪我をして動けなかったのが助かった。

悪石島(あくせきじま)が見える。距離はとても離れているのに大きな島なので近くに見える。元気な人はあれぐらいなら泳いで行けると思って泳いで行って、辿り着いた人はいない。

●1944(昭和19)年8月28日 救助

ああ船がきた。水兵が飛び込んできて、いかだを船で引っ張っていく。ロープを握っている手が開かない。水兵は私の指を引き剥がして、魚でも捕まえたみたいに甲板に放り上げた。

救助されてはじめて、「俺、足怪我してたんだ」とわかった。自分では立てなかった。治療のために船底につれていかれた。このとき考えたのは、「今やられたらもうだめだな」ということ。あの時船の中にいる人はダメだったから。

兄は奄美大島の悪石島に死体で流れ着いた。戦後、大島から連絡があつて遺骨をもらいうけた。

●40歳のとき、対馬丸が沈没する絵を描いた。脳裏に残る光景。知らない人はこれはオーバーだと批判する。でも経験した人はまさにこの通りだと言う。平和などきの考え方と戦時中の考え方は違って、それを話しても理解してもらえないようだ。この絵は今対馬丸記念館にある。(取材日:2011年2月7日)